

# 役得ではなく役損を —ノブレス・オブリージュ—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

窮すれば通ず。作家の五木寛之がその諺と共に「人間はその時になれば何とか切り抜けて歴史をつないできた」とインタビューで語っていました。窮状を嘆いても仕方がない。どこかに活路はあるはずだと鼓舞されたような気がしました。

先を見通すことがきわめて困難な時代を迎えています。不測の事態に備えるためにいったい何が必要なのか。戦後の混乱期に独自の存在感を放った白洲次郎(1902-1985)はプリンシプルと答えました。原理・原則・主義などを意味します。

歴史は繰り返すという格言があります。現代と相通じる激動の時代に白洲は何を守り、活かし、伝えようとしたのか。年頭にあたってあらためて掘り下げて考えてみたいと思います。

## プリンシプルのない交渉は

兵庫県芦屋市の裕福な商家で生まれ育った白洲は旧制神戸一中卒業後、イギリスのケンブリッジ大学に留学します。喧嘩に明け暮れた不良少年は上流階級の子弟と交遊し、愛車ベントリーを乗りまわし、国際人としての振る舞いを身につけます。

ところが昭和金融恐慌の煽りを受けて実家の白洲商店が倒産し、帰国を余儀なくされました。英字新聞の記者となり、伯爵家令嬢の正子と結婚します。のちに正子は随筆家として活躍します。

商社から現在の日本水産に転じた白洲は商談で頻繁に渡欧して駐英大使の吉田茂と意気投合し、

イギリス大使館に泊まり込むようになりました。吉田は親子ほどの年の差でありながら、負けん気が強く、思ったことを率直に口にする白洲を信用します。親英米派の吉田は日米の開戦を回避する工作を進めていました。

白洲も参加し、憲兵隊は吉田反戦グループをヨハンセンと呼んで警戒を強めます。白洲は欧米諸国などの情報を分析し、太平洋戦争に突入する日本の敗北を確信します。

開戦を見越して1940年、現在の東京都町田市にあった鶴川村の土地と農家を買取り、農作業に専念します。鶴川村が武蔵と相模の境にあり、無愛想をもじって武相荘と名づけました。兵役は旧知の元駐英陸軍武官を頼って免れます。

日本が無条件降伏した1945年、外務大臣に就任した吉田に請われて終戦連絡中央事務局に勤めます。GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)との交渉役となり、流暢な英語を駆使して主張すべきことは頑強に主張し、GHQの報告書で「従順ならざる唯一の日本人」と記されました。

交渉にあたって白洲はプリンシプルを何よりも重視していました。「ひとつのことに固執しろ



白洲次郎

というのではない。妥協もいいだろうし、また必要なことも往々ある。しかしプリンシプルのない妥協は妥協でなくて一時しのぎのごまかしにすぎない」と卑屈で欺瞞的な態度を痛烈に批判します。占領されても決してアメリカの奴隷にはならない。いつか必ず独立する。それが白洲を奮い立たせた譲れないプリンシプルでした。

## 地位に執着せず颯爽と

日本政府が1946年2月に起草した憲法改正案はGHQに拒否され、逆にGHQ草案を突きつけられます。翻訳にあたった白洲は民政局長に書簡を送って性急なやり方に抵抗します。だが一蹴されて手記に「今に見ているという気持ち抑えきれず、ひそかに涙す」と書き記しました。

新憲法に対して白洲は後年「この憲法は占領軍によって強制されたものと明示すべきであった」と主張します。その反面「しかし、そのプリンシプルは実に立派である。マッカーサーが考えたのか幣原総理が発明したのかは別として、戦争放棄の条項などその圧巻である。押しつけられようが、そうでなかろうが、いいものはいいと率直に受け入れるべきではないだろうか」と評価しました。そして「個人間においても、国際間においても、本当の友情は腹を割った仲にのみ生まれる」と本音の国際交流による世界平和を唱えます。

吉田内閣成立後の1948年、白洲は貿易庁長官に抜擢されます。戦後の食料不足に苦慮していた吉田は食料の輸入に充てる外貨の獲得を命じます。白洲はただちに海外輸出をめぐる汚職を摘発し、早急な外貨獲得による貿易立国をめざして通産省を設立します。そしてみづからが大臣になるわけでもなく約半年後に退任しました。これは誰にでもできることではありません。吉田はその無欲な働きを「白洲三百人力」と絶賛します。

長身でハンサムでダンディな白洲はまるで風のように颯爽とした男と脚光を浴びる一方、吉田の太鼓持ち、陰謀家、外資の手先などと非難されました。それでも怯まなかったのは地位や名誉や栄光に執着することなく日頃から泥をかぶる覚悟を固めていたからです。「人に好かれようと思って仕事をするな。むしろ半分の人には嫌われるよう

に積極的に努力しないと良い仕事はできない」と職員たちに諭していました。

退任後、東北電力の会長に就任し、1951年に開かれたサンフランシスコ講和会議に全権団顧問として随行します。公的な場所以外ではTシャツとジーンズで通し、日本で最初にジーンズを穿いた男と語り継がれるようになりました。

## 上に立つ者が果たす義務

晩年は軽井沢ゴルフ倶楽部の理事長として80歳までポルシェを走らせます。「自分より目下と思える人間には親切にしろよ」と周囲に言い聞かせ、ゴルフ場でキャディや運転手に横柄な態度をとる客を品性のかげらもない輩と一喝しました。白洲自身はいつも「ありがとう」という言葉を欠かさなかったそうです。83歳で他界したとき遺言状には「葬式無用 戒名不用」と記されていました。

フランスにノブレス・オブリージュという言葉があります。直訳すると高貴な義務、意識すると上に立つ者が果たす義務といってもいいでしょう。19世紀の文豪バルザックが『谷間の百合』で引用して広く知られるようになりました。

欧米諸国では上流階級など社会的地位の高い者に国民に奉仕する義務を課すという道徳的伝統が受け継がれています。富裕層による貧しい人々への慈善活動などもその一環です。イギリスでは第1次世界大戦に上流階級の子弟が率先して戦地に赴き最前線で戦ったと伝えられています。

若き日にイギリスで学び、権力を振りかざす者が大嫌いだった白洲もまたノブレス・オブリージュをしばしば口にしていたそうです。ノブレス・オブリージュは現代の経済活動とも無縁ではありません。企業の社会的責任（CSR）もその一種と見做すことができます。

白洲は犬丸一郎が帝国ホテルの社長に就任したとき「地位が上がれば役得ではなく役損というものがあるんだよ」と伝えました。一般的に地位が上がると役得も増えると思いがちです。しかし白洲に言わせるとそんなことはありません。地位が上がれば上がるほど上に立つ者は私心を超えて職務に臨む気概が求められます。そうした自覚を白洲は役損という簡潔な言葉で表現しました。